

発行：海外養殖魚研究会

連絡先 〒171 東京都豊島区南池袋

3-15-13 前田ビル205号

(株)国際水産技術開発内

TEL 03-982-7139

1982. 1

第22回海外養殖魚研究会が、昭和56年12月19日午後6時から、OAFIC(株)

会議室で行われました。

出席者：	加福竹一郎	(財)海外漁業協会の財団
	山川 純	東京水産大学
	加藤 素久	OAFIC(株)
	岡田 徳男	"
	斎藤 隆	包茎魚介類販売
	森本 直樹	(株)国際水産技術開発
	佐間 真	"
	岡田 孝文	"
	甲 漢武	"

【テーマ】- 浜名湖における1コキリカザミの生態について (山川 純)

1975-1978年の4年間に1コキリカザミの生態について著者は浜名湖におき調査研究を行ったが、当時、1コキリカザミの基礎資料が少なく、1975年の調査開始初年度には徹底的な現地調査と聞き込み等により本およそのありかを得た後1976年より具体的にデータ収集に入った。

なお、1コキリカザミの一般的に習性は生活域が河口に沿った泥、シルト等を中心としたところにあり、餌としては主に甲殻類と軟体動物であるが中でも巻貝類は良く摂餌される。魚類はほとんど餌にするとはない。

調査を行った湖内は大き約70km<sup>2</sup>で葦洲灘に面している。

データ収集は浜名湖にある各漁協の中で漁獲変動も少なく安定した漁獲をあげている白洲漁協を中心に行い、これを基として1コキリカザミ資源の構造が解析できるかを検討した。

調査方法、漁業の形態としては筒建網、刺網、柴漬、タヤ(沖火漁法)等

があり、白洲漁場では主に前建網を使って漁が行われ、刺網はあまり利用されていない。柴漬漁は稚仔魚採捕のために使用されている。

また、調査にあたり標識を利用した標識放流を行い、追跡調査を行った。浜名湖で漁獲される魚種にはカザミ、クルマエビ、ボウ、マイゼ等があり、これらの中には特に相関はみられないが、1971～1972年頃から1コオリカザミの漁獲が極端に上昇したが、これは本湖を中心に干拓工事が行われ、水の循環が変わり、それによって遠く漁獲変動があったと思われる。

演者は数年の1コオリカザミ甲中による調査で、資源の解析を試み、1コオリカザミは約120mmの甲中になると生物学的に最小形に達する(幼虫量の蓄積、1次、2次性徴の変化により解かる。) 120mmの甲中から、いつ頃、どの群れによって増えるかをみると5月頃から3cmの群れがみられ(市場サイズが6～7cmのため、仮定した。) 次に漁獲がとれる1～2月頃に約9cmをモードとした群れがみられ、これを翌年4～5月に受けつかわれることにより推測し、1コオリカザミは、このサイズ群は資源として湖内で越冬しているものと推定した。

また、群れには1年目に漁獲サイズに達するものと2年をかけるものがあり、相互に組み合わせられ、資源を形成しているであろうと推定し、その中の1コオリカザミの生活史というものを演者は解明した。(図参照)

次に稚苗生産では、実際、飼育して稚魚を育てることが、ゾエアからメガロの段階で真菌症により死滅がおき問題となる。

養殖の問題としては、稚苗の確保の他には、水交換が早く、泥がぬれはいい等、特に問題となるものはない。餌料もホリミナチ、イボミナチが利用できる。

1コオリカザミの分類には、世界で現在、4種1亜種が知られ、浜名湖ではその中の2種(ドンカン種、シマフウ種)がみられ、市場ではドンカンが重要種となり、養殖の対象とせりうる。なお、浜名湖に生息する1コオリカザミ

は南方系の種類であり、漁者はこの点について興味を持つ現在、調査研究を続行中である。一方、資源管理、放流事業については、オーストラリアで行われており、浜名湖でも現在行われ、成果があらわになっている。しかし、この資源が乏しい地域では、漁獲量が悪く、成果があらわなく、今後の「コオリカサミ」資源を発展させるための課題の一つである。

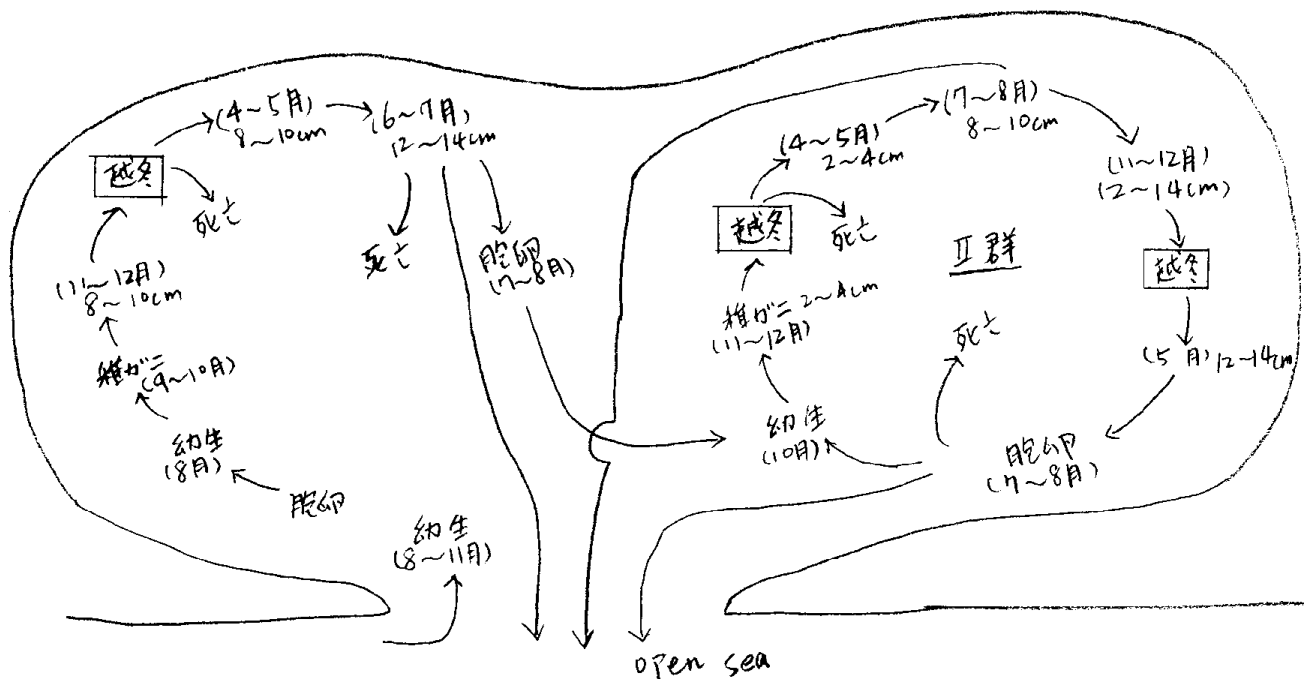


図. コオリカサミの生活史模式図